第 12 回　子ども・子育て支援全国大会ｉｎ山形（報告）※一部敬称略

開催日）　2023 年 11 月 25 日（土）26 日（日）
会　場）　東北文教大学（山形県山形市片谷地 515 番地）
主催者）　日本子ども・子育て支援センター連絡協議会
参加者）　対面　156 名　オンライン　56 個人・団体
ご後援）　こども家庭庁・山形県・山形市・東根市・庄内町
　　東北文教大学・全国保育協議会・日本保育協会・全国私立保育連盟
　　子育てひろば全国連絡協議会
協賛出展）高橋フルーツ、加藤物産、ニシハタシステム、トロル、アスカ、
　　東京イーグル化学、ワールドライブラリ

以下、行政説明および講演・分科会の内容詳細は、大会当日、参加者に配布しました冊子にレジュメやパワーポイントデータを収録しておりますので、ご参照ください。

【開会式】　25 日 12:30～13:30　631 教室

主催者を代表し、会長の柳溪暁秀より参加者に挨拶がありました。その後、来賓として、山形県知事の吉村美栄子様の代理、西澤恵子山形県しあわせ子育て応援部部長様、山形市長の佐藤孝弘様の代理、髙倉正則副市長様より大会開催への祝辞や山形への歓迎の言葉を頂戴しました。

開式行事後は、こども家庭庁成育局成育環境課の大野久課長補佐様より、行政説明を頂きました。子どもを真ん中に取り組む子ども家庭庁の施策について参加者が理解を深める機会となりました。

【全体講演Ａ　副島賢和　氏】　25 日 13:40～15:10　631 教室

昭和大学大学院保健医療学研究科准教授、副島賢和氏より『学ぶことは生きること～子どもの姿と子どもの権利』と題してご講演いただきました。東京都公立小学校教員として 25 年間学級担任を勤める中、昭和大学病院内の小学校さいかち学級を担任されているご経験から、病院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なことをお話してくださいました。学ばせて頂いた内容は、①病院内という環境では、子どもたちは当たり前の気持ちにフタをするし、小さなうそをつく。②遊びや学びの中に自己選択や自己決定を繰り返し、その子の自尊感情「大切な自分」Being が育まれる。③基本的自尊感情「大切な自分」Being があってこその社会的自尊感情「すごい自分」Doing なる。④子どもの今を大切にするということは、患者から子どもにもどる時間を保障することになる。⑤成長・回復のためのかかわりは・Safety「安全・安心の確保」⑥出会い・Challenge「選択・挑戦」、かかわり　Hope「日常の充実・将来の希望」、別れ・出発　３つの頭文字をとって SCHool。⑦学びを保障する＝学ぶこと生きること、日常を支えること。⑧子どもの感情を受容はするが、許容はしない。順番も大事。

副島氏は、涙も笑いも力になるとおっしゃられました。子どもの居心地を大切にし、子どもの心を解きほぐしてきた先生のお話は、涙なくして聞けませんでした。最後に、こども真ん中という考えは、子どもという当事者を見えなくしてしまう。だから、子どももチームの一員として子どもの育ちの困難や課題を解決していく考えが大切だというご意見に強く共感いたしました。

【全体講演Ｂ　　小西貴士　氏】　25 日 15:25～16:35　631 教室

森の案内人・写真家・ぐうたら村共同代表の小西貴士氏より、『森からのまなざし～僕が森で出会ってきた育ちの物語～』というタイトルでご講演いただきました。

講演では、温かくも懐かしい音楽とともに、小西氏がご自身で撮られた、子どもと世界（人間関係以外の様々な生命や物質）との関わり合いが表現されている写真を提示しながら、子どもがこの世界とどのように関わり合っているのかについてお話していただきました。

①子どもは一人称（自身の視点）で「意味を創り出すからだ」と「意味を受けるからだ」をつかいながらこの世界に深く関わり合っていること、②子どもは一人称で語りたくなるような事（物ではない）にたくさん出会うことを通じて、外側のまなざし（客観）だけでなく、内側からのまなざし（主観）も洗練させて、この世界を深く信頼し、理解を深めていくこと、③子どもはからだ全体をつかってこの世界にある異質な事や物に親しみながら、「わたし」という自己と「せかい」への認識を形成していくことにより、子どもの健やかな成長が育まれていく。

講演を通じて、可視化できない子どもの内的世界に触れるとともに、子どものみならず大人も客観的にだけでなく主観的にものごとを捉え、語りながらこの世界に深く関わり合っていくことが、心身のしなやかさにつながっていることを教えていただきました。

【全体講演Ｃ　内山葉子　氏】　26 日 10:00～11:30　631 教室

アレルギー反応とは、アレルゲンに対し痒みや鼻水、鼻閉、発赤、蕁麻疹、喘息発作、アナフラキシー等の症状がよく知られるが、はじめの映像でアレルギーを引き起こす食物を与えた子どもの反応を見てみると、多動行動や情緒不安定で泣き叫ぶ姿、暴力的にふるまう様子を見て、アレルギーへのイメージが一変しました。腸の役割は、消化、吸収と免疫の80％が腸に存在し、ビタミンやミネラル、酵素を作ってくれるが、腸の網目構造が壊れると、リークガット症候群という現代の病気でたくさんの原因となっている病態を引き起こすことを知りました。粘膜全体・血管全体にリーキー（※漏れ出す）が起こるとリンパ球が攻撃を始めるとのこと。最近の研究で脳と腸が直接つながっていることが判明し、子どものリーキーガット関連症状を見てみると、不安、睡眠障害、集中できない、キレやすい、注意欠陥、多動、ボーっとする等々、自閉症スペクトラム児は就学前の消火器症状が 3 倍となっていることと、自閉症スペクトラム児によく見られる疾患や身体症状と類似している点が多いことに驚きました。腸に良い食事とは何を消化し、何を吸収したかが大事であり、子どもは小さな大人ではないことから、大人が食べるものをそのままあげてはいけないこと、未熟で成長していない部分があること、私たちの環境は毒で囲まれていることを知っておくことが大事であり、基本は「知ることによって避けられるもの」があることを知り、早速、実践してみようと思いました。知っておきたいことは以下のとおりです。

・良い素材選びが大切。旬のものを地産地消で。地元のもの、近くのものを買う。
・裏表紙を必ず見ること。
・できるだけのことをやる。続けることの大切さ。

・手の込んだ料理は必要なく、素材を買って作る。刺身、焼き魚、焼き肉、納豆、キュウリの丸かじり。
・食事の時間はゆっくりとよく噛むこと。
・調味料を選ぶ（レトルト、買ったソースやドレッシングは使わない）
・サラダ油やマーガリンは捨てる。主食はなるべくごはん。

ただ、できない人もいることから、悲観的にならず生活や食生活で改善できるため、一日でバランスを完璧にする必要はなく、一週間、一か月でバランスをとってもいいことを知り、安心しました。最後に、栄養の取り込みは、誰とどんな時に食べるかも大事であり、「こころ」がとても大切であることを学びました。

【特別講演　清野京子　氏】　26 日 8:45～9:45　332 教室

福島わらべうたサークル代表・さくらみなみ保育園子育て支援センター所属、清野京子氏に『心とからだを育てるわらべうた』というタイトルでワークショップ形式で行っていただきました。清野氏は、保育士として園児と「わらべうた」あそびを続けて 10 年経た時に、故降矢美彌子氏（宮城教育大学名誉教授）と出会い、福島コダーイ合唱団に入りました。歌を歌い、多文化音楽を学ぶ中で、乳児にとって大事なおっぱいのように「わらべうた」は日本人の心のふるさと・栄養として広がる大切なものと教えていただきました。

始めに、参加者の顔が見えるように丸くなってイスに座りました。参加者が多く、2 重の円になり、以下の内容を実践も交えて楽しく学びました。

1. わらべうたは「物売りの声」や「お手合わせ」「じゃんけん」「手あそび」というように生活の中にもあふれていました
2. わらべうたは民謡よりも昔からあります。民族芸能学の懸田先生によれば、民謡よりも古いとのとのことです。生活の中での占いや。地蔵遊び、鬼来迎、子もらいが子どもたちの遊びに変化していったそうです。
3. わらべうたの良さは、①触れ合い、②子どもにとって自然な発声、③歌と動きによって頭を使う、④お互いが笑顔に、⑤遊具を必要としないことがあります。
4. わらべうたをは、大人がまずは楽しむこと、好きになる事です。そうすれば子どもは「やってみよう」となります。

【分科会　佐藤将之　氏】　①　25 日 16:50～18:00　631 教室　参加者 102 名

⑨　26 日 13:45～14:55　341 教室　参加者 21 名

早稲田大学人間科学学術院教授、佐藤将之氏より『心を育てる こどものための環境』というタイトルでご講演いただきました。

著書『心を育てる保育環境』を基に、[1] 落ち着きを育む環境、[2] やってみようを育む環境、[3] まちの一部となる、地域とつながる環境という内容でお話しいただきました。

具体的には、①「思い」・あらためて考える→全体的なコンセプトを考える。②「環境」・ためしにやってみる→現場でのバランスを考える。③ためしのやってみた時にどう振り返るか？◇保育者がどんな視点を持っているのか、◇現場で実際につくる場合のバランスについてお話しいただき、とりあえずなんでもやってみて、なんでやってみたのかの目的を忘れずに振り返るを繰り返すことの重要性を学ばせて頂きました。理念・「思い」だけあっても「環境」は変わらないとの認識を深めました。

また、スライドによる事例提示では、①こどものため/労働者のための園の音環境、②光とこどもの環境デザイン、③食べたい！作りたい！意欲を引き出す食事環境、④片付けたくなる！使いたくなる！収納の環境づくり、に関して具体的な工夫の例を示して頂き、今すぐ取りいれてみたいと思うものばかりでした。

【分科会　若月ちよ　氏】　②　25 日 16:50～18:00　341 教室　参加者 19 名

かたくりの会会長/NPO 法人ビーンズふくしま元理事長の若月ちよ氏より『幼児期からの性教育～子どもの生きる力を育むために～』というタイトルでご講演いただきました。若月氏は、保育所を退職後、仲間と育児サークルを始めら、1995 年には、性教育の活動をする「かたくりの会」、1998 年には子どもへの暴力防止活動をする「こども CAP ふくしま」を設立されました。不登校の子どもを持つ親としてフリースクールの設立に関わり、2003 年「NPO 法人ビーンズふくしま」理事長に就任し、FS、就労支援、ユースプレイス、ひきこもり相談支援、放課後児童クラブ、子ども食堂などの子ども・若者支援活動を推進。理事長を退任後も、性教育や子どもへの暴力防止プログラムの普及活動、活動の支援を続けられています。

1. 性教育の 3 つの大切な役割、2. なぜ幼児期から性教育を始めるのか、3. 性に関わる子どもの質問にどう答えるか、4. 子どもたちの伝えたいこと、5. 子どもの心の育ちを支える、6. 参考になる絵本や本・性暴力被害の相談窓口、7. “いい加減な”性教育、という内容でわかりやすく、時にパネルシアターも使ってお話しいただきました。

【分科会　国光美佳　氏】　③　25 日 16:50～18:00　631 教室　参加者 12 名

⑧　26 日 13:45～14:55　341 教室　参加者 16 名

『食で変わる心と体～簡単ミネラルクッキング』というテーマで、始めに 20 分ほど講義をしてから、調理室にてミネラルを簡単にとることができる調理実習を行い試食しました。講義では五大栄養素の一つで心身を元気に安定させるために欠かせない栄養素であるミネラルの重要性について事例を交えながら話を聞きました。人間の「やる気」「気分」「うれしい」「楽しい」「集中力」などに関係の深い「神経伝達物質」や「ホルモン」を作る時に働く酵素にもミネラルは欠かせないこと、ミネラルは体だけでなく精神や神経にも大きな影響を及ぼすことを学びました。現代の忙しい人たちにとって便利なコンビニ弁当や冷凍食品やレトルト食品はミネラルが不足しがちとのことでした。ミネラル補給のためのステップとしてまずは主食やだし、油を見直して「かける・混ぜる」で確実にとること、その次にミネラル豊富な食材やミネラルを効率的に吸収するために必要な腸内バランスを整える食材やミネラルを逃さない調理方法を取り入れて「幅広い食材で健全な食卓」を整えることによって心と体がより健康になることを学びました。

調理実習では、ミネラルをたくさん含んだ天然だしやゴマをたっぷり使ったふりかけやみそスープ、煮干しのオイルサワー漬け、にんじんしりしり、ごまじゃが餅を作り、簡単においしくミネラルが取れることが実感できました。様々な地域からの参加者が一緒に調理をして、情報交換をしながら試食ができ有意義な時間となりました。

【分科会　梅津登喜子・古瀬孝子　氏】④25 日 16:50～18:00　331 教室　参加者 18 名

『明日からの保育・子育て支援に民話や絵本を活かすことを願って』をテーマに、山形県内のくまさんの会/ききみみの会の会員である梅津登喜子氏・古瀬孝子氏を講師に迎えて「絵本の読み聞かせ」と「おはなし」が行われました。

「絵本の読み聞かせ」では、①「ととけっこうよがあけた」（こばやしえみこ案、ましませつこ絵　こぐま社)、②「どろんこハリー」（ジーン・ジオン/ぶん、マーガレット・ブロイ・グレアム/え、わたなべしげお/やく　福音館書店）

「おはなし」では、①山形県の民話である「雀もさ雀もさ」(『せんとくの金』山形とんと昔の会）を山形弁で語られました。他にも、②ふしぎなたいこ（『ふしぎなたいこ』岩波書店)、③「ブドーリネク」(『おはなしのろうそ 1』東京子ども図書館)、④「ゆきんこ」(『ストーリーテリングについて』子ども文庫の会編）が語られました。

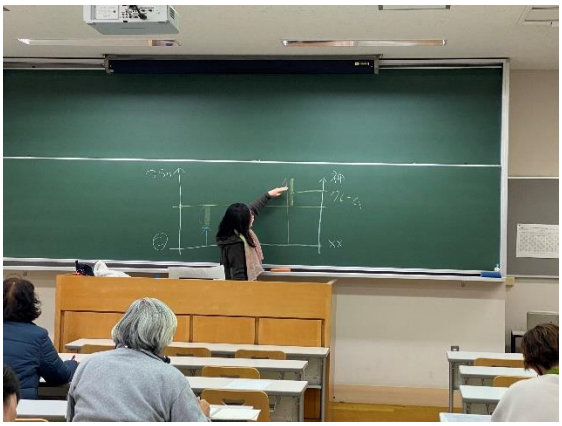
１・２・３歳児には絵本を中心に、４・５歳児以降では絵本とおはなしを織り交ぜて、保育園・認定こども園・幼稚園・小学校などで、おはなしの会の活動を行っているとのことでした。参加者からは、「子ども達はおはなしが大好きで年齢に合わせた絵本やおはなしの選び方など参考になった。」、「民話に興味があり参加した。地域の民話を現場にも活かしたい。」、「子ども達はおはなしが大好きと知り、就職先の現場でもたくさん聞かせたい。」などの感想が寄せられていました。

【分科会　杉山恵理子　氏】⑤25 日 16:50～18:00　731 教室　※本分科会は連続受講
⑩26 日 13:45～14:55　731 教室　　参加者 24 名

＜25 日＞

事前配布していました「ストレス自己診断」を基に進められました。まず、自分自身の心身の状態を健康に保つため、自身のストレス診断を行うことでストレスの対処法を学びました。「自身のストレスを知る」ということが初めての参加者が多い中で、自身の職場内での立場に置き換え、日頃感じているストレスについてグループワークを行いました。また、職場内におけるチームの重要性を学びました。チーム力を高めるためには、自身の情緒の状況が重要であり、情緒の安定を保ち、職務に励むことでチームとしての信頼関係の構築につ

ながることを認識しました。だからこそストレスの自己分析は重要と理解が深まりました。
＜26 日＞
　前日の講義終了時に「ストレス自己診断」のアンケートを行い、その結果に基づきグループに分かれてワークを３つ行いました。
ワーク①「3 回乗ってから質問」相手との会話の中で 3 回賛成（肯定ルール）
ワーク②「愚痴ワーク」どんなことでも言っていいルール
ワーク③「支え合いワーク」持ち時間を決めて、語り手、聞き手に分けれて行う
　参加者にとって、両日とも実りが多かったことが表情から読み取れる分科会でした。



【分科会　辻　広明　氏】⑥26 日 13:45～14:55　631 教室　参加者 92 名

　大池けいあい保育園（福岡県）園長の辻弘明氏から『小さい私の権利を守ってほしい～子どもの立場に立ってみると関わりが変わるはず～』というテーマでご講演頂きました。柔らかくやさしい表情で話され、子どもの気持ちを汲み取り言葉にするときには凛とした表情をする辻氏の講演はあっという間に終わってしまいました。
　子どもは思いを言葉に出来なことが多く、伝えようとする気持ちを表現することがまだ難しい状態にあることから、いやおうなしに大人の要求に応じているということに気づいて行かないといけないんだよ！という内容のお話でした。子どもの立場に立ってみると関わり方が変わるはず。研修以降、子どもの側に立って自分たちが子どもにかけている言葉の内容を検証してみることが多くなり、いかに、指示的な内容の多いことかと考えるようになりました。私たちの子ども時代を振り返ってみると、子どもだけで考えて実行していかなればならない状況にありましたが、今の時代は大人の統治の下で行わなければならない活動ばかりになっているように思います。自分の絵を承諾なく貼りだされるなどといったことは、講演をお聞きするまで考えようともしなかったことでした。
　これからは、子どもの立場に立って考えてみることの大切さをしっかり心に置いて子どもとの日々を過ごします。

【分科会　丸茂　ひろみ　氏】⑦　26 日 13:45～14:55　331 教室　参加者８名

『制度の狭間に挑戦～こども食堂やフードバンクから見えること～』をテーマに、社会福祉法人の地域貢献事業部業務執行理事としての地域の困りごとに対する実際の取り組みを紹介し、活動の中での事例に基づいた報告がなされました。項目としては、以下の４点になります。１．社会福祉法人みどの福祉会、２．私の出会った子ども達の現状、３．ニーズに応える地域貢献活動、４.ひとりぼっちを作らない社会

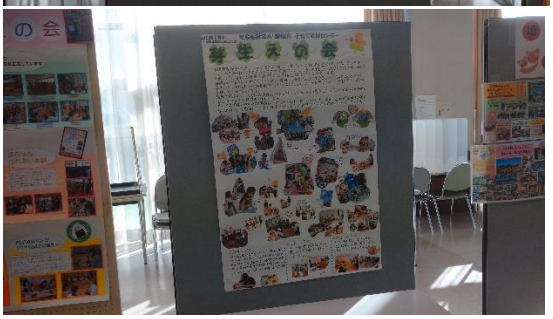
子どもの貧困は、日本の相対的貧困率（厚労省の公式発表）調査で７人に１人であるという結果報告と共に、子どもの「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」について述べられました。また、隠れ貧困の実態からわかった 3 つの「ない」、すなわち、お金・つながり・自信がないことで、貧困の連鎖が起こっていること、更に、貧困や虐待、ヤングケアラーや不登校などが大きな社会問題になっていることが報告されました。その中で、こども食堂やフードバンクの取り組みを通して、沢山の子どもと関わり支援してきた実践例や実際の子どものつぶやき、子どもとの会話などの紹介もなされました。

現代社会の現状を受けとめ、「小中高生が生きていこうと思える社会であるために」を願いながら、みどの福祉会が考えた地域貢献活動を精力的に展開していること、また、支援を必要とする地域住民をひとりも取りこぼさない地域を目指して、第三の居場所が増えるためのアドバイザーとしての活動報告、子どもを取り巻く社会の現状、国の制度や動向、地域貢献事業部の挑戦と結果、未来に向かっての更なる挑戦が語られました。

【オンライン分科会】⑪26 日 13:45～14:55　332 教室　参加者　４名

メイン会場である 631 教室を配信するオンラインの中で、２日目の分科会では希望者に情報交換会を設定しました。理事の髙木早智子がファシリテーターを務め、参加者の取り組みの工夫や悩みを話し合う場としました。少数ではありましたが、日頃は互いを見ることのない北海道・埼玉・富山の参加者だったこともあり、話題は尽きることなく、豊かな情報交換の場となりました。

【子育て支援横丁】　常設　食堂掲示スペース



【情報交換会】26 日８:45～９:45　731 教室　参加者 14 名

『自分たちの活動を伝えよう！聞いてみたいことをとことん聞きだそう！』というテーマで、参加者が 3 グループに分かれて座談会を行いました。それぞれの活動紹介のあと、自分たちの取り組みや聞いてみたい話題提供をお願いすると、どんどん話し合いは盛り上がり、思い思いに語り尽くす 60 分となりました。話し合われた一部の内容をご紹介します。

＜A グループ＞

保育士は発達障がい・グレーゾーンの子どもに対して強い口調で注意したり、その子を変えようとしてきた。そんな時に作業療法士に保育に入ってもらい、行動分析してもらったところ、座れないのには理由があることに気づいた。子どもの発達支援を学び、作業療法士からその子の特徴を捉えた作業療法を知ると、保育士の視点が変わり、イライラしない保育に変わっていった。

＜B グループ＞

児童相談所に通告し、一時保護される子どもを見てきたが、自分の家庭のモノは一切持っていけない。そんな切ない子どもの姿に反して、一時保護された親が「自分では育てられないから保護されて良かった。」と言う親もいる。児相・行政と聞いただけで相手の顔も見ない親もいる。通告する前にもっとその親子の日常を知る身近な存在とソーシャルワーカー的な資質が必要。子育てが楽しくなれば、虐待がなくなる。

＜C グループ＞

保護者の中には経済的な部分以外に能力的に困難を抱えるケースに出会うことがある。こちらは「関わりたい」し、「聞きたい」けど、本人はプライドが高く難しい。年長児なのに 95 ㎝の下着を着せていたりする親だったが、ある日、職員と一緒に「よさこい」の練習をする時があった。職員と一緒に「楽しい時間」を過ごすことで、その親の態度や行動が少しずつ変容していった。

【閉会式】　26 日 15:10～15:40　　631 教室

山形大会の成果として作成された＜山形宣言＞を実行委員の村山恵子が読み上げ、参加者全員で共有が図られました。その後、主催者を代表し、会長の柳溪暁秀より講師と参加者、運営者など関係者に感謝の挨拶がありました。

最後に、ここネットの今後の継続を祈念して作成された次年度開催地の木製プレート（高橋京華　氏作）が、山形大会実行委員の下村一彦から柳溪暁秀会長に返却され、柳溪会長から次期開催地の熊本県を代表して小岱紫明副会長に贈呈されました。

【交流会】25 日 18:50～20:50　山形国際ホテル　参加者 104 名

北は北海道、南は鹿児島の 23 の都道府県から集った仲間と楽しいひと時を過ごしました。山形名物の芋煮に舌鼓をうち、花笠音頭を全員で踊って打ち解け合う中で、視察の約束を交わす姿も見られました。また、特別ゲストとして山形県選出の加藤少子化担当大臣が参加して下さり、国の施策の説明を頂くとともに、現場で子育て支援に尽力する参加者に感謝の言葉と励ましを頂きました。